

巻頭言

“Issue” って “課題” ？

近畿大学 農学部応用生命化学科 研究員
京都大学大学院 薬学研究科 システムケモセラピー分野 特定研究員

た な か け い じ
田 中 啓 司



45 年ほど前、英語もろくにしゃべれない私が、USA Michigan State University, Pesticide Research Center で博士研究員として過ごしていたころ、研究室のセミナーで MATSUMURA (松村文夫) 教授が issue という言葉をよく口にされていました。先生は、“This is a big issue that requires careful consideration for this project.” などと、セミナーで熱く話され、私は前後の話の内容から、issue は“真摯に取り組むべき課題”と受け止めていました。当時の私の語彙力では、issue は“発行や版”と言った印刷関連で使用される単語との理解でしたので、issue を Webster’s New World Dictionary (1979) を繰ってみました。(1) an outgoing, outflow, (2) an outlet, exit, (3) a result, consequence, (4) offspring, (5) a point under dispute (6) a sending or giving out, (7) all that is put forth at one time, (8) (医学用語) a discharge of blood でした。新英和大辞典 (研究社, 昭和 40 年) には、Webster に掲載されていた単語の日本語が示されている程度で、疑問を払拭できませんでした。今回、AI に“issue?” と尋ねたところ、『主に「問題」「課題」「論点」を意味し、解決すべき対象や、人々が議論すべき重要なテーマを指します』との回答でした。“Plant protection is one of big issues for us.” と言ったところでしょうか！ 時とともに“issue”の意味、使われ方が変わってきていると実感し、先生は変遷する issue の意味を先取りされていたのだなと感心しています。このようなことがあったときに、利根川進博士の訃報に接しました。博士の追悼記事とご自身の発言をまとめられた「生命誌ジャーナル」79 号 (2019) を読んで、改めて、ノーベル賞として顕彰された素晴らしい業績を詳しく知りました。博士は京都大学を卒業後、当時の生命科学の中で何が課題かを探りながら、生命を分子の言葉で語る分子生物学に取り組むために渡米、そして、スタインバーグ (CALTECH, パーゼル免疫学研究所) から聞いた面白い課題 —100 年来、未解決の大問題「抗体の多様性」—に取り組むべく、その後スイスに渡って「抗体の多様性」のメカニズム解明を成し遂げられました。その出発点は、“何が課題か？”の見極めであったようです。

最近、いろんな場面で発信される情報、提言、方針の中に“課題”を目にします。第 1 回総合的病害虫・雑草管理 (IPM) 実践指針の見直しに関する検討会 (2025 年 1 月) で、農林水産省消費・安全局植物防疫課から発信された「都道府県における総合防除推進に向けた現状と課題」には、“課題”が 29 箇所出てきます。作物保護場面では、先人の努力・工夫などにより、多くの知恵・

手段を手にしてきましたが、そのたびに、新たな“課題”が姿を現してきています。その課題に対し、真摯に向き合い、打開に向けて必要なのは一ある種、健全な知的栄養・肥料そして経験・情報・知識の泉である一雑誌“植物防疫”だと確信しています。その、植物防疫の創刊号 (当時の雑誌名：創刊農薬、発行社団法人 農薬協会：昭和 22 年 4 月 30 日発行) にトップバッターとして武居三吉先生 (京都帝国大学教授) が“有機殺虫剤は大別して、除虫菊、デリス或はニコチンの様な植物から得られる天然物と、クロールピクリン、DDT の様な合成物との二つに分類する事が出来る。”との書き出しで始まる総説を寄稿され、その中で、“DDT のような勝れた合成剤でも、分解性の点では未だ天然物に遠く及ばない。「自然は化学合成に於いても人間より賢明で且つ巧妙である」というべきである”と、そのときすでに DDT の問題点を指摘され、あるべき合成農薬化合物の課題を提示されています。少し話が飛びますが、この雑誌創刊の 2 年前の 5 月 (終戦直前) に、武居先生が主体となって、日本で BHC を殺虫剤として実用化すべく、第一回 BHC 技術者研究懇談会が京都大学で開催 (1945 年 5 月 21 日) されたこと、防虫科学 (京都大学発行の学術雑誌) 13 号 (1949) に〈雑録〉として掲載されています。農林省から 10 人、原粉製造会社 (20 社) から 44 人、BHC の加工会社から 12 人、京大武居・中島研究室から 15 人が参加。そのころ、日本軍は南方で多くの戦死者を出し大苦戦。戦死者の多くは蚊に刺されてのマラリヤによる戦病死で、DDT を入手できない日本軍は、連合軍のように DDT を前線で散布しながら戦いを進めることができず、蚊に対して無防備に前進するだけで、前線での蚊の防除という課題の克服のために、BHC に着目されたのだと思います。同じころ、海軍は、農学部の向かいにある理学部の荒勝研に、戦局打開のために原爆の開発を依頼 (陸軍は理研の仁科研に依頼) しており、数年前 NHK で“太陽の子”として TV ドラマ化、話題となりました。このように、戦局が膠着または悪化する局面では共通したいくつかの致命的な課題が浮き彫りになってくること、古今東西関係なく、最近の海外ニュースを見ていて思います。真に打開すべき課題を見誤っている結果なのでしょう。

MATSUMURA 先生は、issue で直面している研究上の“課題”に対し、先行情報を精査し、熟慮のうえ、具体的な方針を立てて課題を克服して研究を進めなさいと、研究員を鼓舞されていたのだと理解し、今は、何が“課題か？”を、絶えず日々自問するようにしています。

(日本植物防疫協会 元理事)